北村透谷 樋口一葉 集

現代日本文學全集

4

現代日本文學全集 4

北村透谷
樋口一葉集

昭和三十一年十月二十日　印刷
昭和三十一年十月二十五日　發行

著者　北村透谷
　　　樋口一葉

發行者　古田晁
東京都千代田區神田小川町二ノ八

印刷者　山田一雄
東京都青梅市根ケ布三八五

發行所　筑摩書房
東京都千代田區神田小川町二ノ八
〔電話〕東京二九局(29)七六五一(代表)
振替　東京　一六五七六八

整版　株式會社精興社
印刷　株式會社精興社
製本　矢島製本所

北村透谷集 目次

楚囚の詩 …… 七
蓬萊曲 …… 一三
詩 …… 三七
みゝずのうた …… 三七
一點星 …… 三八
孤飛蝶 …… 三九
ゆきだふれ …… 三九
平家蟹 …… 四〇
髑髏舞 …… 四〇
古藤菴に遠寄す …… 四一
彈琴と嬰兒 …… 四二
ほたる …… 四二
蝶のゆくへ …… 四二
眠れる蝶 …… 四二
雙蝶のわかれ …… 四三
露のいのち …… 四三
我牢獄 …… 四四
星夜 …… 四七
宿魂鏡 …… 五一
評論及び感想 …… 六〇
「日本の言語」を讀む …… 六〇
當世文學の潮模樣 …… 六一
時勢に感あり …… 六二
泣かん乎笑はん乎 …… 六三
「マンフレッド」及び「フオースト」 …… 六四
厭世詩家と女性 …… 六五
粹を論じて「伽羅枕」に及ぶ …… 六九
「平和」發行之辭 …… 七一
想斷々(1) …… 七二
想斷々(2) …… 七二
漫言一則 …… 七三
松島に於て芭蕉翁を讀む …… 七三

最後の勝利者は誰ぞ…………七五
トルストイ伯…………七七
一種の攘夷思想…………七九
「歌念佛」を讀みて…………八一
德川氏時代の平民的理想…………八三
三日幻境…………九〇
各人心宮內の祕宮…………九四
心機妙變を論ず…………九八
處女の純潔を論ず…………一〇一
他界に對する觀念…………一〇四
秋窓雜記…………一〇七
鬼心非鬼心…………一〇九
「罪と罰」…………一一一
富嶽の詩神を思ふ…………一一二
人生に相涉るとは何の謂ぞ…………一一三
山庵雜記…………一一八
明治文學管見…………一一九
實行的道德…………一二九
復讐・戰爭・自殺…………一三〇
頑執妄排の弊…………一三二
內部生命論…………一三三
熱意…………一三七
國民と思想…………一三九
主のつとめ…………一四三
客居偶錄…………一四四
桂川（吊歌）を評して情死に及ぶ…………一四六
情熱…………一四七
哀詞序…………一四九
思想の聖殿…………一五〇
兆民居士安くにかある…………一五一
萬物の聲と詩人…………一五一
漫罵…………一五四
一夕觀…………一五五
エマルソン小論…………一五五
日記・書簡・手記…………一六九

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

樋口一葉集 目次

闇櫻……一九七
うもれ木……二〇〇
曉月夜……二一一
雪の日……二一九
大つごもり……二二一
ゆく雲……二二七
にごりえ……二三三
十三夜……二四五
わかれ道……二五三
たけくらべ……二五六
あきあはせ……二七三
すゞろごと……二七五
日記……二七六
　若葉かげ（明治二十四年四月―六月）……二七六
蓬生日記一（明治二十四年九月―十一月）……二八三
につ記一（明治二十五年一月―二月）……二九四
につ記二（明治二十五年二月―三月）……二九九
につ記（明治二十五年四月―五月）……三〇四
日記しのぶぐさ（明治二十五年六月）……三〇八
しのぶぐさ（明治二十五年六月―八月）……三一三
しのぶぐさ（明治二十五年八月―九月）……三一七
につ記（明治二十五年九月―十月）……三一九
道しばのつゆ（明治二十五年十一月―十二月）……三二二
日記（明治二十六年六月）……三二四
につ記（明治二十六年七月）……三二五
塵の中（明治二十六年七月―八月）……三二九
塵中日記（明治二十六年八月―九月）……三三六
塵中日記今是集（明治二十六年十月―十一月）……三三七
塵中日記（明治二十六年十一月）……三三九

塵中日記（明治二十六年十一月―二十七年二月）……三四一
日記ちりの中（明治二十七年二月―三月）……三四五
塵の中日記（明治二十七年三月）……三四九
塵中につ記（明治二十七年三月―五月）……三五一
水の上日記（明治二十七年六月―七月）……三五二
水の上日記（明治二十八年四月―五月）……三五七
水の上につ記（明治二十八年五月）……三五九
みづのうへ（明治二十八年五月）……三六三
透谷文學の生命（勝本清一郎）……四〇五
樋口一葉（塩田良平）……四一〇
水の上（明治二十八年五月―六月）……三六四
水のうへ日記（明治二十八年十月―十一月）……三六九
水のうへ（明治二十九年一月）……三七二
みづの上日記（明治二十九年五月―六月）……三七五
みづの上日記（明治二十九年六月―七月）……三八二
みづの上日記（明治二十九年七月）……三八六
書簡……三九二
解説……四一五
年譜……四二三

装幀　恩地孝四郎

北村透谷集

楚囚之詩

自序

余は遂に一詩を作り上げました。大膽にも是れを書肆の手に渡して知己及び文學に志ある江湖の諸兄に頒たんとまでは決心しましたが、實の處躊躇しました。余は實に多年斯の如き者を作らんことに心を寄せて居ました。が然し、如何にも非常の改革、至大艱難の事業なれば今日までは默過して居たのです。

或時は飜譯して見たり、又た或時は自作して見たり、いろいろに試みますが、底事此の篇位の者です。然るに近頃文學社界に新体詩とか變体詩とかの議論が囂しく起りまして、勇氣ある文學家は手に唾して此大革命をやつてのけんと奮發され數多の小詩歌が各種の紙上に出現するに至りました。是れが余を激勵したのです、是れが余をして文學世界に歩み近よらしめた者です。

余は此「楚囚の詩」が江湖に容れられる事を要しませぬ、然し、余は確かに信ず、吾等の同志が諸共に協力して素志を貫く心になれば遂には狹隘なる古來の詩歌を進歩せしめて、今日行はるゝ小說の如くに且つ最も優美なる靈妙なる者となすに難からずと。

幸にして余は尙ほ年少の身なれば、好し此「楚囚の詩」が諸君の嗤笑を買ひ、諸君の心頭を傷くる事あらんとも、尙ほ余は他日是れが罪を償ひ得る事ある可しと思ひます。

元とより是は吾國語の所謂歌でも詩でもありませぬ、寧ろ小說に似て居るのです。左れど、是れでも詩です、余は此樣にして余の詩を作り始めませう。又た此篇の楚囚は今日の時代に意を寓したものではありませぬから獄舍の模樣なども必らず違つて居ます。唯だ獄中にありての感情、境遇などは聊か心を用ひた處です。

明治廿二年
四月六日　　透谷橋外の僑寓に於いて
北村門太郎謹識

第一

曾つて誤つて法を破り
　政治の罪人として捕はれたり、
余と生死を誓ひし壯士等の
　數多あるうちに余は其首領なり、
　　中に、余が最愛の
　　まだ蕾の花なる少女も、
　　國の爲とて諸共に
　　この花婿も花嫁も。

第二

余が髮は何時の間にか伸びていと長し、
　前額を蓋ひ眼を遮りていと重し、
肉は落ち骨出で胸は常に枯れ、
　沈み、萎れ、縮み、あゝ物憂し、
　　歲月を重ねし故にあらず、
　　又た疾病に苦む爲ならず、
　　浦島が歸鄕の其れにも
　　はて似付かふもあらず。
余が口は涸れたり、余が眼は凹し、
　曾つて世を動かす辯論をなせし此口も、
　曾つて萬古を通貫したるこの活眼も、
はや今は口は腐れたる空氣を呼吸し
　眼は限られたる暗き壁を睥睨し
　且つ我腕は曲り、足は撓ゆめり、
嗚呼楚囚！　世の太陽はいと遠し！
　噫此は何の科ぞや？
　たゞ國の前途を計りてなり！
噫此は何の結果ぞや？
　此世の民に盡したればなり！
　　去れど獨り余ならず、
吾が祖父は骨を戰野に曝せり、
吾が父も國の爲めに生命を捨たり、
　余が代には楚囚となりて、
　とこしなへに母に離るなり。

第三

獄舍！　つたなくも余が迷入れる獄舍は、
二重の壁にて世界と隔たれり

左れど其壁の隙又た穴をもぐりて
　逃場を失ひ、馳込む日光もあり、
余の青醒めたる腕を照さんとて
　壁を傳ひ、余が膝の上まで歩寄れり。
余は心なく頭を擡げて見れば、
　この獄舎は廣く且空しくて、
中に四つのしきりが境となり、
　四人の罪人が打揃ひて――
曾つて生死を誓ひし壯士等が、
　無殘や狹まき籠に繋れて！
彼等は山頂の鷲なりき、
　自由に喬木の上を舞ひ、
又た不羈に清朗の天を旅し、
　ひとたびは山野に威を振ひ、
慓悍なる熊をおそれしめ、
　湖上の毒蛇の巢を襲ひ
世に畏れられたる者なるに
　今は此籠中に憂き棲ひ！
四人は一室にありながら
　物語りする事は許されず、
四人は同じ思ひを持ながら
　そを運ぶ事さへ容されず、
各自限られたる場所の外へは
　足を踏み出す事かなはず、
　たゞ相通ふ者とては
　全じ心のためいきなり。

第四

四人の中にも、美くしき
我花嫁……いと若かき
其の頬の色は消失せて
顏色の別けて悲しき！
嗚呼余の胸を擊つ
其の物思はしき眼付き！
彼は余と故鄕を全じうし、
　余と手を携へて都へ上りき――
京都に出でゝ琵琶を後にし
三州の沃野を過りて、濱名に着き、
富士の麓に出でゝ函根を越し、
　遂に花の都へは着たりき。
愛といひ戀といふには科あれど、
　吾等雙個の愛は精神にあり。
花の美くしさは美くしけれど、
　吾が花嫁の美は、其蕊にあり。
梅が枝にさへづる鳥は多情なれ、
　吾が情はたゞ赤き心にあり。
彼れの柔き手は吾が肩にありて、
　余は幾度か神に祈を捧たり。
左れどつれなくも風に妬まれて、
　愛も望みも花も萎れてけり。
一夜の契りも結ばずして
花婿と花嫁は獄舎にあり。
　獄舎は狹し
　狹き中にも兩世界――
彼方の世界に余の半身あり、
此方の世界に余の半身あり、
彼方が宿か此方が宿か？
　余の魂は日夜獨り迷ふなり！

第五

あとの三個は少年の壯士なり、
　或は東奧、或は中國より出でぬ、
彼等は壯士の中にも余が愛する
　眞に勇豪なる少年にてありぬ。
左れど見よ彼等の腕の縛らるゝを！
流石に怒れる色もあらはれぬ――
　怒れる色！　何を怒りてか？
　自由の神は世に居まさぬ！
兎は言へ、猶ほ彼等の魂は縛られず、
磊落に遠近の山川に舞ひつらん、
彼の富士山の頂に汝の魂は留りて、
　雲に駕し月に戲れてありつらん、
嗚呼何ぞ穢なき此の獄舎の中に、
　汝の清淨なる魂が暫時も居らん！
斯く云ふ我が魂も獄中にはあらずして
日々夜々輕るく獄窻を逃伸びつ
余が愛する少女の魂も跡を追ひ
　諸共に、昔の花園に舞ひ行きつ
塵なく汚なき地の上にほふバイヲレツト
其名もゆかしきフォゲツトミイナツト
　其他種々の花を優しく摘みつ
ひとふさは我胸にさしかざし
　他のひとふさは我が愛に與へつ
ホツ！　是は夢なる！
見よ！　我花嫁は此方を向くよ！

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

其の痛ましき姿！
　嗚呼爰は獄舍
　此世の地獄なる。

第六

世界の太陽と獄舍の太陽とは物異れり
　此中には日と夜との差別の薄かりき、
何ぜ……余は晝眠る事を慣として
　夜の靜なる時を覺め居たりき。
ひと夜。余は暫時の坐睡を貪りて
　起き上り、厭はしき眼を強ひて開き
見廻せば暗さは常の如く暗けれど、
　なほさし入るおぼろの光……是れは月！
月と認れば余が胸に絕えぬ思ひの種、
借に問ふ、今日の月は昨日の月なりや？
　然り！　踏めども消せども消えぬ明光の月、
嗚呼少かりし時、曾つて富嶽に攀上り、
　近かく、其頂上に相見たる美くしの月
美の女王！　曾つて又た隅田に舸を投げ、
花の懷にも汝とは契をこめたりき。
　仝じ月ならん！　左れど余には見えず。
　仝じ光ならん！　左れど余には來らず。
　　呼べど招けど、もう
　汝は吾が友ならず。

第七

牢番は疲れて快く眠り、
腰なる秋水のいと重し。
意中の人は知らず余の醒たるを……
眠の極樂……尙ほ彼はいと快し
嗚呼二枚の毛氈の寢床にも
此の神女の眠りはいと安し！
余は幾度も輕るく足を踏み、
愛人の眠りを攪さんとせし。
左れど眠の中に憂のなきものを、
覺させて、其を再び招かせじ。
眼を鐵窗の方に回へし
余は來るともなく窻下に來れり
逃路を得んが爲ならず
唯だ足に任せて來りしなり
　もれ入る月のひかり
　ても其姿の懷かしき！

第八

想ひは奔る、往きし昔は日々に新なり
彼山、彼水、彼庭、彼花に余が心は殘れり、
彼の花！　余と余が母と余が花嫁と
もろともに植ゑにし花にも別れてけり。
思へば、余は暇を告ぐる隙もなかりしなり。
誰れに氣兼するにもあらねど、ひそひそ
　余は獄窻の元に身を寄せてぞ
何にもあれ世界の音信のあれかしと
　待つに甲斐あり！　是は何物ぞ？
送り來れるゆかしき菊の香！
　余は思はずも鼻を聳えたり。
こは我家の庭の菊の我を忘れで、
遠く西の國まで余を見舞ふなり。
　あゝ我を思ふ友！
　恨むらくはこの香
　我手には觸れぬなり。

第九

またひとあさ余は晩く醒め、
　高く壁を傳ひてはひ登る日の光
余は吾花嫁の方に先づ眼を送れば、
　こは如何に！　影もなき吾が花嫁！
思ふに彼は他の獄舍に送られけん、
　余が睡眠の中に移されたりけん、
とはあはれな！　一目なりと一せきなりと、
（何ぜ、言葉を交はす事は許されざれば）
永別の印をかはす事もかなはざりけん！
三個の壯士もみな影を留めぬなり、
　ひとり此廣間に余を殘したり。
朝寢の中に見たる夢の僞なりき。
　噫僞りの夢！　皆な往けり！
　　往けり、我愛も！
　また同盟の眞友も！

第十

倦み來りて、記憶も歲月も皆な去りぬ、
　寒くなり暖くなり、春、秋、と過ぎぬ。
暗さ物憂さにも余は感情を失ひて

今は唯だ膝を組む事のみ知りぬ。
罪も望も、世界も星辰も皆盡きて、
余にはあらゆる者皆。……無に歸して
たゞ寂寥、……微かなる呼吸——
　生死の闇の響なる。
甘き愛の花嫁も、身を抛ちし國事も
忘れはて、もう夢とも又た現とも！
嗚呼數步を運べばすなはち壁。
三回まはれば疲る、流石に余が足も！

第十一

余には日と夜との區別なし。
左れど余の倦たる耳にも聞きし、
曉の鷄や、また塒に急ぐ烏の聲、
兎は言へ其形……想像の外には曾つて見ざりし。
ひと宵余は早くより木の枕を
窻下に推し當て、眠りの神を
祈れども、まだこの疲れたる腦は安らず、
　半分眠り——且つ死し、なほ半分は
生きてあり、——とは願はぬものを。
突如窻を叩いて余が靈を呼ぶ者あり
あやにくに余は過にし花嫁を思出たり、
弱き腰を引立て、窻に飛上らんと企てしに、
こは如何に！　何者……余が顏を擊たり！
計らざりき。幾年月の久しきに、
始めて世界の生物が見舞ひ來れり。
彼は獄舎の中を狹しと思はず、
梁の上梁の下俯仰自由に羽を伸ばす、
能き友なりや、こは太陽に嫌はれし蝙蝠、
我無聊を訪來れり、獄舎の中を厭はず。
想ひ見る！　此は我花嫁の化身ならずや
嗚呼約せし事望みし事は遂に來らず、
忌はしき形を假りて、我を慕ひ來るとは！
ても可憐な！　余は蝙蝠を去らしめず。

第十二

余には穢なき衣類のみなれば、
是を脫ぎ、蝙蝠に投げ與ふれば、
彼は喜びて衣類と共に床に落たり、
余はひ寄りて是を抑ゆれば、
蝙蝠は泣けり、サモ悲しき聲にて、
何ぜなれば、彼はなほ自由を持つ身なれば。
恐るゝな！　捕ふる人は自由を失ひたれ、
卿を捕ふるに……野心は絕えて無ければ。
嗚呼！　是は一の蝙蝠！
余が花嫁は斯る惡くき顏にては！
左れど余は彼を逃げ去らしめず、
何ぜ……此生物は余が友となり得れば。
好し……暫時獄中に留め置かんに、
左れど如何にせん？　彼を留め置くには？
吾に力なきか、此一獸を留置くにさへ？
傷ましや！　なほ自由あり、此獸には。
　余は彼を放ちやれり、
自由の獸……彼は喜んで、
疾く獄窻を逃げ出たり。

次ぎの畫は甚しき失策でありました、是れでも著名なる畫家と熱心なる彫刻師との手に成りたる者です。野邊の夕景色としか見えませぬが、獄舎の中と見て下さらねば困ります。

第十三

恨むらくは昔の記憶の消えざるを。
　若き昔時……其の樂しき故郷！
暗らき中にも。回想の眼はいと明るく。
　畫と見えて畫にはあらぬ我が故郷！
雪を戴きし冬の山。霞をこめし溪の水。
　よも變らじ其美くしさは。昨日と今日。
——我身獨りの行末が……如何に
　浮世と共に變り果てんとも！
嗚呼蒼天！　なほ其處に鷲は舞ふや？
嗚呼深淵！　なほ其處に魚は躍るや？
　春？　秋？　花？　月？
是等の物がまだ存るや？
曾つて我が愛と共に逍遙せし、
樂しき野山の影は如何にせし？
摘みし野花？　聽きし溪の樂器？
あゝ是等は余の最も親愛せる友なりし！
　有る——無し——の答は無用なり、
　常に余が想像には現然たり。
　　羽あらば歸りたし。も一度、
　　貧しく平和なる昔のいほり。

第十四

冬は嚴しく余を惱殺す。
壁を穿つ日光も暖を送らず。
日は短し！　して夜はいと長し！
寒さ瞼を凍らせて眠りも成らず。
然れども。いつかは春の歸り來らんに。
好し。顧みる物はなしとも。破運の余に。
たゞ何心なく春は待ちわぶる思ひする。
余は獄舍の中より春を招きたり。高き天に。
遂に余は春の來るを告られたり。
鶯に！　鐵窓の外に鳴く鶯に！
知らず。そこに如何なる樹があるや？
梅か？　梅ならば、香の風に送らる可きに。
　美くしい聲！　やよ鶯よ！
余は飛び起きて。
　僅に鐵窓に攀ぢ上るに——
鶯は此響には驚ろかで。
　獄舍の軒にとまれり。いと靜に！
余は再び疑ひそめたり……此鳥こそは
　眞に。愛する妻の化身ならんに。
鶯は余が幽靈の姿を振り向きて
　飛び去らんとはなさずして
再び歌ひ出でたる聲のすゞしさ！
　余が幾年月の鬱を拂ひて。
卿の美くしき衣は神の惠みなる。
卿の美くしき調子も神の惠みなる。
卿がこの獄舍に足を留めるのも
また神の……是は余に與ふる惠なる。
　然り！　神は鶯を送りて。
余が不幸を慰むる厚き心なる！
　嗚呼夢に似てなほ夢ならぬ。
余が身にも……神の心は及ぶなる。
思ひ出す……我妻は此世に存るや否？
彼れ若し逝きたらんには其化身なり。
我愛はなほ仝じく獄裡に呻吟ふや？
若し然らば此鳥こそ彼れが靈の化身なり。
自由、高尙、美妙なる彼れの精靈が
この美くしき鳥に化せるはことわりなり。
斯くして、再び余が憂鬱を訪ひ來る——
誠の愛の友！　余の眼に淚は充ちてけり。

第十五

鶯は再び歌ひ出でたり、
　余は其の歌の意を解き得るなり。
百種の言葉を聽き取れば、
　皆な余を慰むる愛の言葉なり！
浮世よりか、將た天國より來りしか？
余には神の使とのみ見ゆるなり。
嗚呼左りながら！　其の練れたる態度
恰かも籠の中より逃れ來れりとも——
　若し然らば……余が同情を憐みて
　來りしか。余が伴たらんと思ひて？
鳥の愛！　世に捨てられし此身にも！
鶯よ！　卿は籠を出でたれど。
　余は死に至るまでは許されじ！
余を泣かしめ、又た笑ましむれど。
　卿の歌は。余の不幸を救ひ得じ。
我が花嫁よ。……否な鶯よ！
　おゝ悲しや。彼は逃げ去れり
　嗚呼是れも亦た浮世の動物なり。
若し我妻ならば。何ど逃去らん！
余を再び此寂寥に打ち捨てゝ。

この慘憺たる墓所に殘して
――暗らき。空しき墓所――
其處には腐れたる空氣。
濕りたる床のいと冷たき。
余は爰を墓所と定めたり。
生ながら既に葬られたればなり。
死や。汝何時來る？
永く待たすなよ。待つ人を。
余は汝に犯せる罪のなき者を！

第十六

鶯は余を捨てゝ去り
余は更に怏鬱に沈みたり。
春は都に如何なるや？
確かに。都は今が花なり！
斯く余が想像中央に
久し振にて獄吏は入り來れり。
遂に余は放されて。
大赦の大慈を感謝せり。
門を出れば。多くの朋友。
集ひ。余を迎へ來れり。
中にも余が最愛の花嫁は。
走り來りて余の手を握りたり。
彼れが眼にも余が眼にも仝じ涙――
又た多數の朋友は喜んで踏舞せり。
先きの可愛ゆき鶯も爰に來りて
再び美妙の調べを。衆に聞かせたり。

蓬萊曲

序

蓬萊曲將に稿を脫せんとす、友人某來りて之を一讀し詰て曰く、蓬萊山は古來瑞雲の靉靆くところ、樂仙の盤桓するところ、汝何すれぞ濫に靈山を不祥なる舞臺に假り來つて狂想者を悲死せしむる。又た何すれぞわが邦固有の戲曲の躰を破つて擅に新奇を衒はんとはする。

余は直に之を遮つて曰く、わが蓬萊曲は戲曲の躰を爲すと雖も敢て舞臺に曲げられんとの野思あるにあらず、余が亂雜なる詩躰は詩と謂へ詩と謂はざれ余が深く關する所にあらず、韻文の戰爭は江湖に文壇の良將あり、唯だ余が此篇を作す所以の者は、余が胸中に蟠據せる感慨の幾分を寒燈の下に、彼の蠶娘の營々として纖絲を其口より延べ出る如く余が筆端に露洩せしむるに過ぎざるのみ、然も彼れが勞むるは家を造りて之に入らんとするなれども余が晝間劇務の後に滴々半烹の句を成すところの者は徒に余をして債を起して價ある白紙を反古と化せしむるに止まらんを知る。蓬萊山は大東に詩の精を迸發する、千古不變の泉源を置けり、田夫も之に對してはインスピレイションを感じ、學童も之に對して詩人となる、余も亦た彼等と同じく蓬萊嶽に對する詩人となれること久し、回顧すれば十有六歳の夏なりし、孤峯其絶巓に登りたりし時に余は始めて世に鬼神なる者の存するを信ぜんとせし事ありし。崎嶇たる人生の行路遂に余をして彼の瑞雲横はり仙翁樂しく棲めると言ふ靈嶽を假り來つて幽冥界に擬し半狂半眞なる柳田素雄を悲死せしむるに至れるなり。友人再び曰く、然らば汝は魔鬼魅魍の類を信ずるや。余答へて曰く、信ずるにもあらず、信ぜざるにもあらず、悲哀極つて頓眠する時に神女を夢み、劇熱を病んで壁上に怪物の横行するを見るが如きのみ。友人乃ち放笑して去る。此に於て童子をして燈に油を加へしめ筆を走らせて談話の概略を記し以て序に代ふ。

明治二十四晩春　　透谷橋外の小樓に於て

蟬羽子識

曲中の人物

鶴　翁　（蓬萊山の道士）
源　六　（樵　夫）
雪　丸　（仙　童）
柳田素雄　（子爵、修行者）
勝山清兵衞　（柳田の從者）
露　姫　（仙　姫）
大魔王、鬼王若干、小鬼若干、
戀の魅、青鬼、等。

第一齣（一場）

蓬萊山麓の森の中
日沒後

（柳田素雄琵琶を抱きて森中に徘徊し）
（從者勝山清兵衞少し晩れて來る。素）
（雄琵琶を取出て一彈調を成さず仰で）
（蓬萊嶽の方を眺盼する所）

素。雲の絶間もあれよかし、
わが燈火なる可き星も現はれよ、
　この身さながら浮萍の
西に東に漂ふひまのあけくれに
なぐさめなりし斯の靈山、
いかなれば今宵しも、麓に着きて
見えぬ、悲しきかな〳〵。
　戀しき御姿の見えぬはいかに、
わが心、千々に碎くるこの夕暮。」
　　都を出でゝ
わがさすらひは春いくつ秋いくつ、
守る關なき歳月を、輕しとて仇し
草わらんじ。會釋なく履きては
捨て、履きては捨て、踏みてはのこし
踏みてはのこす其迹は
　白浪立ち消ゆ大海原

越え來し方を眺むれば
　泡沫の如くに失行く浮世。」
牢獄ながらの世は逃げ延びて
　幾夜旅寢の草枕、
夢路はる〳〵たどりたどれど
　賴まれぬものは行末なり。
折々に音づるゝと覺しきは
　彼の岸に咲けるめでたき法の華、
からくも悶え手探れば、こはいかに、
　まことゝ見しもの、これも夢の中な
　る。」
浮世の水は何所とも知ず流れ行く、
　われも亦た流るゝ儘の旅の身を、
　　寄せて息めんたのめもなし。
早瀨緩瀨と變るは水のならひなる、
　變れど止まることはなし、
わが旅もまた急ぐ急がぬ折こそあれ、
　いつかはまことに靜まらん。
その稍しづまる渚には、
　蜑の刈藻の根を絕たで、
　　うたてや意をしがらむなる。」
あちこちのめづらしき山、めづらしき水、
　愛づるが中こそ稍安く、
蟬の羽のひえわたる寢床にも眠りけれ、
　眠るといふも眼のみ、
心は常に明らけく、世の無情をば
　睨みつ慨きつ喞ちけれ。
左程にきらはるゝわれなれば、
　逃げ出んこそ易けれど

わが出る路にはくろがねの
　連鎖は誰がいかなる心ぞ。
左らばとて留まらんとすれば
　笞を擧げて追ふものぞある。」
　　　家出せし時
つらく別れし戀人は、はかなくも、
　無常の風の誘ひ來て
無き人の數に入れりと聞きしより
　花のみやこも故鄕も
空しくなりて、われをのまむとする
　菩提所のみぞ待つなる可し。」
去ねよ、去ねよ、彼世には汝が友の
　待ちあくがれて招くものを
と罵る聲は、「死」のつかひよりや出らん、
　われも世を去らまくほしき
思ひ出の昨日今日にはあらなくに如何せん
　招けば「死」もわが友ならず。」
いづこを見ても鞭持つ鬼、
　わが脊、わが面を圍むなり、
往け往けと追はるゝ儘に
　行衞定めぬ旅衣、
汚れやつれて見る影もなき態、
　鬼の姿にもまがふべし。
左ればとて世を避くる身は
　何どか新衣のひまあらん。」
　　世の鞭笞稍や遠ければ
深山霞立籠めて空しく迷す夕もあり、
　浮世の風こやみするところには
朝霧渡れる水の音に驚き覺る折もあり、

追はれぬ時は心も急かず夢は現と
　いづこを宿と定めねば
　　かはりつゝ、
　書取上げて眠を驅りつ
燈火の疲れはてゝ、自らに消ゆるまで。
　書の無き折はまた
狂ふまで讀む自然の書、世のあやしき奧、
　物の理、世の態も
早や荒方は窮め學びつ、生命の終り、
　未來の世の事まで
自づから神に入りてぞ悟りにき。」
　指屈むれば盡き難き
名所の數々に、昔と今を訪ひはたし
月をも花をも厭ぬる程に眺めき。
　さても西の都の麗はしきも、
　また東方の花の堤の
屋形の船の醉心地。おもひかへせば
仇なりし夢なりし幻なりし。
南の末にたゞよひし時には烟噴く山
北の極をあさりし時には凍氷の丘、
　めづらし、めづらしと
たゞへ喜びしが。これも亦た瞬刻
の慰快なりし。今は早や、夢にも
上らず、回想も動かず。
　われには早や珍らしき
者あらず、樂しき者あらず、
　この世、この世、美くしき
この世の悲しきかな、抑今は何者ぞ。
山を河を、野を里を、殿を城を、

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com